

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 16 日現在

機関番号： 82503
 研究種目： 基盤研究（c）
 研究期間： 平成 21 年度 ～ 平成 23 年度
 課題番号： 21601010
 研究課題名（和文） 「おばあちゃんの畑」をテーマとした地域・学校との連携による博物館活動
 研究課題名（英文） Museum activity by cooperation with the community and school on the theme of "a grandma's field"
 研究代表者
 島立 理子（SHIMADATE RIKO）
 千葉県立中央博物館・生態環境研究部・生態学・環境研究科・主任上席研究員
 研究者番号： 0 0 3 3 2 3 5 4

研究成果の概要（和文）： 「おばあちゃんの畑」をキーワードに様々な団体が連携して博物館活動を実践した。当初は博物館主導による活動であったが、経過と共に、地域の人々自身が、地元にある様々な資料に対する意識が高まってきている。

エコミュージアムを地域に根付かせるきっかけとして、多くの人々が参加できる素材からスタートすると事が効果的であることがわかった。

研究成果の概要（英文）： Various organizations cooperated "the grandma's field" in the keyword, and museum activity was practiced.

Although it was activity led by a museum at the beginning, the consciousness to various data which have people of the area themselves in local is increasing with progress.

When the eco-museum was started from the material in which many people can participate as a cause rooted in the area, it turned out that things are effective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	500,000	150,000	650,000
平成 22 年度	600,000	180,000	780,000
平成 23 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：博物館学

キーワード：博物館・地域連携・伝承・エコミュージアム

1. 研究開始当初の背景

1990年代後半以降、日本においてもエコミュージアムという概念が紹介され、山形県朝日町をはじめとした各地にエコミュージアムがつくられた。

エコミュージアムの理念は、その地の現在の生活や文化がどのような経緯でつくられてきたかということに住人自身が探求し、それを保存、活用、展示することを通して、理解し、再確認し、当該地域の発展に寄与する

というものである。

しかし、日本におけるエコミュージアムの多くは、「生活や文化がどのような経緯でつくられてきたかということに住人自身が探求し、それを保存、活用、展示する」という側面は薄く、町づくりや観光などを目的として計画された物が多く、「エコミュージアム」という言葉だけ浸透してきた。

千葉県立中央博物館では、平成15年度から「房総の山のフィールド・ミュージアム」

というプロジェクトを行っており、応募者も当初からプロジェクトのメンバーとして活動してきている。このプロジェクトは、房総丘陵の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる博物館活動で、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究などをおこなうものである。

平成20年度には、千葉県立中央博物館「房総の山のフィールド・ミュージアム」が事務局となり、文化庁の「芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）」の委託を請け、『おばあちゃんの畑』プロジェクト』を実施した。

この事業は「数十年前まで、畑で育てられていたのは、その地域で何世代も種子をとり続けてきた作物であり、農作業に使っていた農具や作業着も地域の土質、植生な地域の環境にあわせ、特色あるものを使っていた。また、種子、農具といった「物」だけでなく、種子の自家採種の方法、農具の作り方や使い方など、その背後には多くの先人から伝えられた知恵があった。それぞれの地域には、その地域に根ざした文化が生きていた。この事業では、地域の文化が詰まった『畑』を『おばあちゃんの畑』と名付け、地域で活動する諸団体と連携して『おばあちゃんの畑』について調べ、体験し、発信することを通して、新たな地域文化の創造を目指す」という趣旨でおこなっている。連携団体は君津市立三島小学校、君津市立秋元小学校、君津市清和公民館、久留里城址資料館、清和の古文書を読む会、宿場の風の会、NPO法人久留里フィールド・ミュージアムである。

この活動の目的は地域の人と博物館が連携して「調べ、体験し、発信することを通して、新たな地域文化の創造を目指す」ものであり、エコミュージアムの目指すところと同じである。この活動をはじめて半年が経過しているが、団体間の交流や博物館と団体との情報の共有など、すでに多くの成果が生まれつつあった。

2. 研究の目的

日本におけるエコミュージアムの多くは、「生活や文化がどのような経緯でつくられてきたかということに住人自身が探求し、それを保存、活用、展示する」という側面は薄く、町づくりや観光などを目的として計画された物が多く、「エコミュージアム」という言葉だけ浸透してきた。

本研究は、「おばあちゃんの畑」という一つのテーマのもと、学校や、公民館などの公共施設、文化活動団体、「地域おこし」を目的とするNPOなど地域の諸団体、博物館などが連携して活動することで、日本におけるエコミュージアムの可能性について実践的に研究するものである。

3. 研究の方法

「おばあちゃんの畑」という一つのテーマのもと、学校や、公民館などの公共施設、文化活動団体、「地域おこし」を目的とするNPOなど地域の諸団体、博物館などが連携して活動することで、日本におけるエコミュージアムの可能性について実践的に研究する。

4. 研究成果

① 房総の山のフィールド・ミュージアムについて

房総の山のフィールド・ミュージアム」はもともと千葉県立中央博物館分館山の博物館の設置構想にその起源がある。山の博物館の開設にむけて様々な調査をおこなってきた。しかし、財政難により設置は白紙に、また行財政改革などにより、県内に10あった県立館も市町村への移譲、中央博物館の分館化などの再編成がおこなわれた。

このような状況下で開設にむけて蓄積したものを、何らかの形で県民に還元していくための手段として考えだされたのが、「地域そのものを博物館の展示室であり、収蔵庫である」と考える「ソフトウエア中心の「博物館活動」である。

昭和26年制定の博物館法では、『「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関』とある。

フィールドを収蔵庫・展示と考えて読み替えれば、様々な新しい展開が見えてくる。フィールドにおける資料の分布調査、所在確認は収蔵品目録作成という、いわば博物館としては基本の作業である。昨年発生した東日本大震災以降、「資料救済ネットワーク」などの組織が各地で立ち上がっているが、このような分布調査は資料救済のために大きく貢献することができるだろう。

また、「資料の保管あるいは育成」という言葉から展開すれば、地域における保全活動がそれに当たるだろう。無形の資料の保全もその中に含まれる。この作業は収蔵庫に収集された資料の管理に比べ、はるかに多くの困難が想像されるが、フィールドが収蔵庫と考える以上は避けて通れない課題である。

これらの博物館職員だけでは対応しきれないし、フィールド全体が博物館といった時点で、フィールド・ミュージアムは地域の方々と協働なしには成立しない事業である。

② 「おばあちゃんの畑」プロジェクトのはじまり

「おばちゃんの畑」プロジェクトは、地域の人々が集まれる場所（広場）を作り、イベントなどを開催することを目的としてはじめた事業である。しかし、広場を作りっぱなしではおもしろくない。どうせ作るのなら、その広場を活用したことができないか、楽しいことができないか、そんな考えから「畑」を思いついた。

初年度は文化庁芸術文化拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）の助成を受け市民団体、三島小学校、君津市立久留里城址資料館、君津市清和公民館とも連携して活動をスタートさせた。事業実施のための「畑」は、君津市市宿の耕作放棄地を市民団体が、君津市立三島小学校の校庭の一部を三島小学校3年生（当時）が耕作することとなった。2年目以降は各団体がそれぞれ活動資金を調達し、紆余曲折はあったものの現在も継続して活動を行っている。

「おばあちゃんの畑」プロジェクトで栽培している作物は在来品種としているが、定義を厳しくおこなっているわけではない。「地元で数世代にわたって自家採種してきた品種」程度の定義である。これらの種子を集める作業は初年度三島小学校の児童もおこなった。1年間で約60サンプルの種子があつまった。この数はサンプル数なので、種子を採りやすいオクラや菜っ葉などは数サンプルあり、60種があつまったというわけではない。在来作物というと、京野菜が有名だが、その他にも最近では各地で在来作物の発掘や復活が行われており、販売もされるようになってきた。たとえば、山形在来作物研究会の活動、大阪府吹田市の在来の吹田くわい保存会の活動など様々であるが、「おばあちゃんの畑」プロジェクトでは、在来作物を保全する側面よりは、種子の栽培から広がる様々な地域の生活文化に注目して活動している。

③「おばあちゃんの畑」プロジェクトの活動

三島小学校、君津市市宿それぞれを中心とし現在の活動を紹介する。

(1) 君津市立三島小学校の「おばちゃんの畑」

三島小学校にはフィールド・ミュージアムの現地の拠点、教室博物館がある。毎週金曜日に千葉県立中央博物館の学芸員が在室している。「おばあちゃんの畑」プロジェクト開始以前からの付き合いのある学校だ。

三島小学校は全校児童が40名ほどの小さな学校で、現在3、4年生は複式学級である。「おばあちゃんの畑」は基本的には3、4年生の総合学習の中で扱っている。

カボチャ、オクラ、キビ、ゴマなどを栽培しており、栽培の指導や除草のお手伝いには児童の祖母や市宿のおばあちゃんたちがあっている。

複式学級であることで、良い効果を生み出していることもある。年間の畑作業はほぼ毎年同じなので4年生にとっては2度目の体験である。それに対して、担任の教員も下級生もほぼ初めての体験である（教員のほとんどは農作業の経験がない）。それぞれの作業について、4年生が3年生に教える場面が多々ある。

加えて、種子は自家採種なので4年生は自分たちで採種した種子を植えるという、循環を経験することになる。

また、同じ経験を繰り返すことで、技術（とっては大げさであるが）の定着がはかれるのではないだろうか。

収穫した作物は基本的には全て食べる、あるいは利用するように心掛けている。

アブラナの仲間を育て、種子を絞り油をとる作業も体験している。7キロの菜種の種子を絞ると、840ccの油がとれる。この量の少なさに子どもたちは、驚く。また、絞るかすは「油粕」である。畑の肥料として使う。またまた循環を経験するのだ。

ごく少しの油を児童は持ち帰り、家庭での話となる。すると、祖父母が幼い時代には、近所に油を絞ってくれる場所があった事、かつては油用のナタネを栽培していた事、その種子は現在栽培しているものよりもかなり大きかったことなど、さまざまな話がひろがっていくのである。畑仕事に話が進み、菜っ葉の収穫を増やす方法などを祖母から教わってきたりしている。

夢のような話をここまで繰り返してきたが、いくつかの課題もある。たとえばオクラやナスといった作物の収穫時期は夏休み期間中である。学校の活動としてそれらを食べるという展開にもっていくのは難しい。

また、小学校のカリキュラムは部外者が思っているよりはるかにきっちり決まっている。その中にいかに組み入れられるかが存続にあたっての最も重要な部分である。その上、畑作業は生育具合、天候によって作業の日程がかわってくる。学校の活動に組み入れていくのは難しい。小規模校であるため、融通することが可能であり、何とか継続できている。

担任となった教員のほとんどは農業経験がない。この活動に積極的に取り組む先生がいる一方で、慣れない活動であるため消極的な先生もいる。毎年同様の活動というのは難しいが、継続することができればとりあえずの目的は達成である。毎年のように、その年の活動がどうなっていくのか気がかりではあるが、継続は力なりである。

(2) 君津市市宿の「おばちゃんの畑」

地元の団体「宿場の風の会」の有志が活動している。活動の主体は60代後半から80

代前半のおばあちゃんたちであるが、60代後半のK氏がまとめ役をしてくださっている。現在毎月第2日曜日を「畑の作業日」と定め、午前9時頃から作業をおこなっている。この日は、近隣に住む伝統的な農法などに興味のある人、あるいは新規就農者、「農的」な暮らしに興味のある人などが訪れ一緒に活動している。

栽培しているのは、カボチャ、オクラ、ナス、ウリ、リョクトウ、ササゲ、キビ、ゴマ、ショウガ、マナ、ネギ、大豆、ムギなどの畑作物、それに加え田んぼでは明治から昭和はじめにかけて県内で栽培されていた稲を数種類育てている。

春から秋にかけては畑や田んぼの作業は月に一度の作業日だけでは不足なので、田畑の様子をみながらおばあちゃんたちが管理している。逆に冬場はあまり畑の作業がないために、落ち葉はきをして堆肥を作ったり、収穫した米と大豆を使って味噌作りをしたり、コムギを使ってパンやピザを焼きみんなで食べて、収穫を祝ったりもする。

米やムギなどの収穫物は地元の公民館の文化祭や地元近くでおこなわれるイベントの際に販売するなどしており、毎年数万の収益がある。これらの収益は畑作業の時のお茶代になったり、新年会をしたり、日帰りの旅行などの費用にあてられる。仕事に出てきた分で割返し、現金として支給しようとの考え方もあったが、実際に参加しているおばあちゃんたちの強い意向で現在のような形になったようだ。

また、毎年君津市清和公民館主催の親子教室とコラボによる活動もおこなっている。昨年度はコムギの収穫とパン、ピザ作り、一昨年は田植えと稲刈りとご飯を食べる会を「畑の作業日」と一緒におこなった。この活動によって、子ども、母親、祖母という三世代の交流が畑を舞台におこなわれる。

最近「農的」という言葉をみかける事が多くなった。多分かつてはそのような言葉を見かけることはなかったであろう。農業に関心のある若者たちの多くは、この「農的」な暮らしにあこがれを抱いている人が多いだろう。筆者には「農的」な暮らしとは何か、あるいは何が彼らをそうさせているかといった事について検討することはできないが、「おばあちゃんの畑」の活動の多くの部分、たとえば在来の作物、おばあちゃんたちの農作業といった事柄が、彼らの心をくすぐるらしい。そのため、畑の活動にも「農的」な暮らしに興味のある若い人たちも訪れる。伝統的な農法などに興味のある人、あるいは「農的」な生活に興味のある人々

彼らはこれまで博物館をほとんど利用したことのない人々であり、古くから農業をおこなってきたおばあちゃんたちともほとんど交

流のない人々である。「おばあちゃんの畑」プロジェクトが今まで交流のなかった人々を繋いだということになる。

④「おばあちゃんの畑」プロジェクトの活動で発掘された「資料」

このプロジェクトの活動を通じてこれまで目を向けられてこなかった多くの資料が発掘された。そのいくつかを紹介する。

在来作物の種子

プロジェクトの中で発掘された種子の中から、地域の生活に密着しているものについて紹介する。

○マナ

君津市清和地区の正月のお雑煮には、小さな菜っ葉を入れる。地元で「マナ」「オカンナ」と呼ぶアブラナの仲間である。11月上旬に種子を蒔き、8センチほどに成長した柔らかい葉を使う。

清和地区からひと山越えた君津市亀山地区にはフユナという雑煮用の菜っ葉が残っている。

正月に欠かせない菜っ葉は、各家々で代々種子をつないできている。

○カボチャ

かつてはカボチャといえば、白い皮のゴツゴツとした日本カボチャで、シロッカボチャと呼ばれていた。現在流通しているカボチャのほとんどは西洋カボチャで、ホクホクとした食感であるが、

在来の日本カボチャはねっとりとした、食感である。このねっとりとしたカボチャが好きだという方々がいるため、種子が受け継がれて来た。

最近「富津黒皮」という名称で流通している日本カボチャがある。百貨店なので一個800円ほどの高値で販売されているが、外見は富津黒皮の皮を白くしたのがシロッカボチャである。お味は好みにもよるが、シロッカボチャに軍配があがる。

○コムギ

君津市清和地区ではお盆の送り火、迎えにコムギの麦ガラを使う。「お盆に必要なだから」という事で、種子が受け継がれてきた。コムギは調整が大変であるため、最近では栽培したコムギは食べずに、単に麦ガラ用にだけ栽培されてきたのである。

○ヤエナリ（リョクトウ）

春雨の原料であるリョクトウは、ヤエナリと呼ばれ、かつては清和地区でも栽培されていた。

現在の私たちにはあまりなじみのないマメであるが、古くは各地で栽培され、甘く煮た

り、おかげにして食べていた。

韓国や中国、台湾、インドなどのアジア諸国では現在でもリョクトウを日常的にて食べており、その加工のしかたも様々であり、決してまずい食べ物ではない。日本ではなぜ食べなくなってしまったのだろうか。

地域で種子を集め、それを栽培することで様々な新しい発見がいくつかあった。種子の多様性、種子は年中行事などの儀礼とかかわることで継承されやすいこと、もう1つ半栽培ともいうような栽培方がおこなわれていることである。

種子の多様性について紹介する。シロッカボチャと地元で呼んでいる種子が数サンプル集まったので、全種類栽培したところ、外見は同じでも、果肉の柔らかさや食感が少しずつ違うことがわかった。その差は庖丁を入れた瞬間にわかったほどである。

また、種子をいただきにお年寄りの所に行くと、同じ呼び名で呼ばれている作物についても、だれだれの家の子から育った作物は美味しい、あるいは柔らかいなどという話を聞く。地域で自家採種されてきた種子は非常に多様性が豊かであったのだ。

マナ、コムギのように、年中行事に利用する作物は種子が多く保存されてきたことはすでにみたとおりである。コムギなどは食べるためだけでなく、麦藁を使うためだけに数十年の間種子を取り続けてきていたということに驚かされると。

その延長線上で半栽培とでもいうような事例を発見した。地元ではヒョウナあるいはヒョウと呼び、お盆の仏様への供え物の一つとして「ひょう菜のよごし」（ひょうのおひたし）を使う。

これはヒユという植物で、現在ではなじみのない野菜であるが、バイナムという名で葉が、アマランサスという名で種子がごく少量流通している。古くから食べていた野菜の一つで、「延喜式」にも登場する。紛らわしいが、多肉植物であり食用となるスベリヒユとは別物である。

夏になると清和地区の畑の片隅には数本のヒユが育っている。タネはとらずに、放っておいても落ちたタネが翌年芽を出すので、それを数本残しておくという。自分で勝手に生えてくるから、オノロバエ、オノレバエと呼び、お盆の仏様への供え物以外にも、葉物の少ない夏場の菜っ葉として食卓にのぼるそうである。これは完全な栽培でも、野生でもない。その中間の半栽培とでもいうべき事例である。ちなみに、マナをはじめとしたアブラナの仲間の栽培も同様の行うことがあるという。

農業技術

農業にかかわる技術も大切な無形の資料である。

○種子の蒔き方

小さなゴマの種子は「千鳥蒔き」である。1つの畝に右左交互に蒔いていく。

カボチャはポットで苗を仕立てる。1つのポットに種子を2粒いれていく。

蒔いた種子の上に土をかけるのは、手でなく足でそっとかけていく。地元ではこの作業を「土で消す」と呼んでいる。

おばあちゃんたちは、それを体験的に知っている。もちろん、これらの播種の方法は農業の教科書に載っているだろう。しかし、実際に畑に集まる新規就農者をはじめとした人たちがやってみると、そう簡単でないことがわかる。写真をみていただきたい。これは、水苗代で苗取りをしている風景の写真であるが、手前の虎刈りのようにになっているのは、私たちや新規就農した人たち、向こう側のきれいに生えそろうている部分はおばあちゃんたちが種子をまいたところだ。このようにみると、その差は一目瞭然である。もっとも、最近では水苗代は作らないし、種子を蒔くにも、土をかけるにも道具があつて誰でも（もちろん多少の熟練は必要であろう）できるようになってしまっているのだから、この技術が生かされる場は今後はないのかもしれない。

○種子の選抜方法

「おばあちゃんの畑」では種子を購入することはほとんどない。今年育てたものの中から、翌年そだてる種子を選抜する。実はこの選抜技術も無形の資料である。

たとえば、ナスの場合は、種子をとるものは大きく大きく、はちきれんばかりに成長させ、秋には木ごと引き抜き逆さにして乾燥させる。すると、実は完全に乾燥して小さく、小さくなってしまい、これを翌年優しく砕いて種子を取り出す。どの果実を選ぶかが実は大きなポイントとなる。形のよい、おいしそうなものを選ばよというわけではない。一番最初に実った、根っこに近い部分の果実を残しておかなくてはならないのだ。

ナスに限らず、それぞれの作物によって種子の残し方は違う。どのようにして種子を残すか、種子を選ぶかひとつひとつが経験から得た知識なのである

○堆肥作り

山の中の落ち葉を熊手でかき集、積み上げて堆肥にする。

「おばあちゃんの畑」での作業で驚いたのは、落ち葉の集め方である。足と熊手を使って上手に落ち葉を集め、固める、ほんの少しの藁や小さな枝などを使って俵状にする。隙間だらけの俵だが、持ち上げても落ち葉はこぼれず、俵が崩れることはない。腐らないも

のは使っていないので、そのまま積み上げる。たとえば、大きな袋なものに入れて落ち葉を運ぶことに比べれば、はるかに多くの落ち葉を、短時間で運ぶことができるのだ。有機肥料を使った栽培をする農家も増えてきているし、新規就農者の多くは化成肥料を使わない。堆肥の作り方の書籍がたくさん発行されている。このような方法は堆肥の作り方を書いた本にも載っていないだろう。しかし、堆肥を作りの背後には、このような隠れた技術がある。

5. 「おばあちゃんの畑」プロジェクトの果たす役割

三重県立博物館長の布谷知夫氏の著書のなかに「博物館は利用者に対して一方的な教育をする場ではなく、博物館の機能を活用しながら、博物館を利用する人々が様々な体験をし、発見をする場である」（布谷知夫『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』2005 雄山閣）とある。

「おばあちゃんの畑」プロジェクトは、博物館自前の施設や人材、予算はほとんどないに等しい。活動のほとんどは地元の方々や連携機関に依存した活動だ。そのためさらに進めて「みんなにとって価値のある活動」であることを意識しなくてはならない。

博物館、地元のおばあちゃんたち、そこに集まる人々の三者にとって「おばあちゃんの畑」は何を与えているのかを紹介し、最後に博物館活動としての「おばあちゃんの畑」プロジェクトの意味を考えてみたい。

○博物館にとっての「おばあちゃんの畑」プロジェクト

フィールドを展示であり収蔵庫と考える博物館側にとって、この活動を通じて資料の所在（種子、農業技術なども含む）が明らかになった。たとえば先に紹介した落ち葉はきをはじめとした技術の記録（映像）を撮ることができたし、これまで注目してこなかったが、実は生活を語る上で重要な「あたりまえの技術」が多く在ることもわかった。その場で目にしなければわからなかったことである。聞き取り調査だけは気が付かなかったことだろう。フィールドの大切さを改めて感じた。

また、多少飛躍してしまうが、活動が活発化し多くの人が集まることによって、もしかしたらその中から「普通の技術の伝承者」もあらわれるかもしれないという淡い期待すらわいてくる。

○おばあちゃんたちにとっての「おばあちゃんの畑」プロジェクト

活動に参加しているおばあちゃんたちにとってはどうだろうか。「おばあちゃんの畑

がはじまってから、健康体操（君津市がおこなっている健康増進のための体操で町会毎におこなっている）への参加者が増えたよ」と言われたのは、活動をはじめた年である。博物館に頼まれて、畑をしているという事が張り合いにつながったのだろうか。耕作している畑の面積も当初の倍以上になった、これは地元の方たちが考えて広げたのである。2年目からは稲の栽培もはじめた。品種はもちろんコシヒカリではない。積極的にかかわっている。

「おばあちゃんの畑に行ってくるよ～」と言ってでかければ、でかける理由もたつ。おばあちゃんたちが集まれば、話に花も咲く。社会とのつながりの一つになっているのだろう。かつては農村に様々な講集団があった、月に一度、あるいは年に数回、正々堂々と集まって「遊ぶ」。そういった講がなくなってきた今、「おばあちゃんの畑」がお年寄りの楽しみの場となっているのかもしれない。畑からは若干の収益が生まれる、それを使って日帰り旅行に出かけたり、忘年会をしたりと楽しい。

最初は畑の作業日に人々が集まりはじめたのも地元の人たちにとっては、若干の驚きであったようだ。若者と話しをするのも楽しい。

新聞や雑誌の取材も受け（「自然保護」No. 520 特集「食」が広げる人のつながり 「エココロ」No. 60 特集 愛しのグランマなどで紹介されている）、海外から訪問者（『自家採種ハンドブック「たねとりくらぶ」を始めようも』の著者であるミシェル・ファントン、ジュード・ファントン夫妻）もあった。純粋にうれしいし。自分たちが普通におこなっていたものに価値を再発見したのだ。

○畑にあつまる人々にとっての「おばあちゃんの畑」プロジェクト

市宿のおばあちゃんの畑には様々な人が集まってくる。新規就農者、都会に住み農業にあこがれる人、近所に住んでいるけれど農業経験の無い人、家庭菜園をやっている人、食に関心のある人。希望者にはメーリングリストに入ってもらい、作業の情報を配信している。たくさん集まる日もあれば、数人しか集まらない日もある。

土いじりが好きだが庭を持っていないとか、お年寄りと話をしたいから、野菜の固定種に興味があるから、など畑にやってくる理由は様々である。

「実は私たち、農作業の事はあまり知らないんです。ただ、みんなにくらべて早く移住してきているから、どうしても教える立場になってしまいます」と言った鴨川在住の新規就農者夫婦の言葉が印象的だ。鴨川は多くの新規就農者が集まっていて、その人々による

コミュニティができあがっているが、彼らの多くは農業をするのがはじめて。しかし、もともとある地元のコミュニティの仲間に入るのは難しい。どうしても、仲間同士で教えあうことになってしまう。

農村に移住して農業をはじめめる人がいても、これまで地域で培われてきた農業技術は伝承されていないのである。伝統的な農作業に興味はあるけれど、学ぶ場がない。そうした人々に「おばあちゃんの畑」という活動を通じ、学ぶ場を提供できる可能性があり、伝承されていく可能性が見えてきた。

また、前にも触れたが彼らのような人々は今まで博物館とはほとんどかかわりの無かった人々である。「おばあちゃんの畑」という活動によって、新たな博物館の利用者層を開拓できたことにもなる。

○博物館活動している「おばあちゃんの畑」プロジェクト

自前の施設を持たないフィールド・ミュージアムは、人と人とのつながりの中でしか活動することができない。「市民ともに作る博物館」でしか、博物館たりえない。「おばあちゃんの畑」プロジェクトはそれを象徴している。「おばあちゃんの畑」が様々な人々をつなぎ、また博物館と人々をつないでいる。

「おばあちゃんの畑」プロジェクトに対する博物館側の関わりも年々変化してきている。活動をはじめた当初は、どちらかといえば博物館主導の形で展開してきたが、最近ではそれぞれの団体主導の活動に博物館が一員として参加している形に近くなってきた。

フィールドが展示室であり収蔵庫であると考えれば、この流れは自然なものであり、そうあるべきである。「おばあちゃんの畑」プロジェクトによって発掘された様々な資料の保存の主体は、地域の方々であり、それを活用していくのも地域の方々である。保存の主体は決して博物館ではない。博物館ができるのは、ただそのお手伝いをするだけである。

筆者はかつて同じ千葉県立博物館である房総のむらに勤務していた。「体験博物館」という名称で、伝統的な「技」を資料と考え、それを継承する事を目的とした博物館であるが、誰が継承するのかが明らかになっていない。これは、松崎憲三氏も指摘している（「民俗の文化資源化と生涯学習・地域活動—千葉県立中央博物館と房総のむらを事例として—」 「日本常民文化紀要」第29輯）ところである。

「おばあちゃんの畑」プロジェクトは、その継承する主体と技術保持者を結びつけることができるかもしれない。長年の生活の中で身につけて来た様々な技術は、博物館で体験することで継承できるものではない。生活

の中で使い、長年にわたって習得できるものである。フィールドにある無形の「資料の保管あるいは育成」のための一つのツールにも成りえる。「展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする」部分については、十分にクリアしていると思うが、いかがだろうか。

ここまで、良いことづくめを書いてきた。もしかしたら、後継者が生まれる期待もしているが、実際問題としてどうだろうか。農業だけでは食べていけない、手作業だけではなおさらである。これは単に、文化行政の分野にとどまらない話になってくる。社会の仕組み自体の問題になるだろう。

あと数年後を見据えて、次なる手段を講じなければならぬ時期がきている。博物館人としての私たちにいったい何ができるのか、常にかんがえていかねばならない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

島立 理子 建物のない博物館の試み—房総の山のフィールド・ミュージアム「おばあちゃんの畑」プロジェクト— 月曜ゼミナル 5 巻 2012

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

「おばあちゃんの畑」プロジェクト web ページ

<http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/hatake/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島立 理子 (SHIMADATE RIKO)

研究者番号：0 0 3 3 2 3 5 4

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：